

授業研究論文

中学校社会科歴史的分野学習案 「二・二六事件」

宮崎 正康 *

Class Plan for the February 26th Incident

MIYAZAKI Masayasu

The purpose of this class plan is to help the junior high school students understand the February 26th Incident.

The young officers of the army led about 1,300 soldiers in an attempt to stage a coup d'etat on February 26, 1936. With this, the February 26th Incident broke out.

The young officers killed and wounded the important persons of the government and occupied Prime Minister's Office. They believed that the people were suffering hard lives because the important persons of the government were mistaken in the national policies they adopted.

Therefore, the young officers thought that the development of the country could be achieved if the important persons of the government were removed, and the Emperor was enabled to decide policies directly.

At first, the heads of the army took the actions that agreed with the young officer's ideas.

However, from the beginning, Emperor Hirohito strongly requested the young officers' forces to be repressed. Because Emperor Hirohito trusted the important persons of the government, he felt fury toward the young officers who had murdered them.

The heads of the army understood the strong anger of Emperor Hirohito, and changed to a policy of repressing the young officers' forces. They identified the young officers' forces as rebels, and repressed them.

The young officers' coup d'etat was thus suppressed.

I want the junior high school students to understand most of all the difference in ideas between Emperor Hirohito and the young officers.

The young officers thought that the country should be developed by the direct decision of Emperor Hirohito, and had high expectations of the emperor.

However, Emperor Hirohito did not think that the functions of a modern nation should be decided by the emperor directly. He thought that the important persons of the government were playing an

* 東洋英和女学院大学 国際社会学部 教授
Professor, Faculty of Social Sciences, Toyo Eiwa University

important role in developing the nation.

It was an unrequited love that the young officers held such high expectations of Emperor Hirohito.

In the following class, the junior high school students are made to examine the desires of the heads of the army after the February 26th Incident. However, a detailed content of the following class is omitted in this outline.

キーワード：二・二六事件、陸軍青年将校、クーデター未遂、昭和天皇

Keywords：the February 26th Incident, young officers of the army, Coup d'etat attempt, Emperor Hirohito

第1章 第1時の授業

1 この授業について

1936（昭和11）年2月26日午前5時、陸軍の青年将校たちが、第1師団歩兵第1連隊、同第3連隊、近衛歩兵第3連隊などの兵士約1,500名を率いて決起した。二・二六事件が勃発した。

青年将校たちは、重臣を殺傷し、首相官邸・陸軍省・警視庁などを占拠した。

青年将校たちは、国策の決定にかかわる重臣や軍閥・官僚・政党などの「君側の奸」のために、国のかたち（国体）が破壊され、農民を始めとする国民が苦しい生活にあえいでいると考えた。君側の奸を倒して、天皇が親政を行える国体にすれば、君民一体による日本の発展がとげられると考えた。

二・二六事件をおこした陸軍青年将校と決起部隊に対して、陸軍大臣など陸軍首脳は最初は、その考えを認める行動をとった。

しかし昭和天皇は、早くから決起部隊を鎮圧することを強く求め続けた。

陸軍首脳も昭和天皇の強い怒りにふれて、鎮圧へと対策を変えた。

28日午前5時には部隊を強制撤退（武力鎮圧）させることができる奉勅命令が発令された。部隊は叛乱部隊となっていった。

29日に包囲軍は叛乱部隊に迫り、叛乱部隊は原隊に復帰していった。

叛乱を引き起こした陸軍青年将校たちは、その後、死刑などの刑罰を受けた。

この授業は、最大のクーデター未遂事件となった二・二六事件について、生徒に考えさせたい。

2 この授業のねらい

この授業のねらいは、「二・二六事件をおこした陸軍青年将校たちの天皇への思いと、それを鎮圧することを主張し続けた昭和天皇の思いの違いに、生徒が気づくこと」にある。

3 授業の展開

「問題①のプリント」と「問題①の資料」、「問題②のプリント」と「問題②の資料」、「問題③のプリント」と「問題③の資料」、「問題④のプリント」、「授業ノート」を配布する。「授業ノート」は、B4の用紙。本稿では省略。授業評価（授業に満足・普通・不満、時間は余った・普通・不足など）のアンケートを付加する。

指示1 自由にグループをつくって、問題の①から③を回答しなさい。
クラス全員が全部の回答を出来るように、学び合いをしなさい。
学び合いが優先します。
余裕があれば、資料を読み直して、問題④を考えなさい。
25分間です。

生徒が、自由なグループをつくって問題の回答を始めるとともに、教師は「学習メニュー」を黒板に貼る。

学習のめあて	
「二・二六事件における陸軍青年将校の思いと、 昭和天皇の思いを考える。」	
学習メニュー	
はじめに	2分
課題1 問題① (学習グループ)	9分
課題2 問題② (学習グループ)	8分
課題3 問題③ (学習グループ)	8分
課題4 問題④ 個別学習	7分
学習グループ	5分
一斉学習	6分
まとめ	5分

教師は、タイマーを課題1の9分に合わせて、スイッチを押す。(以下タイマーを同様に、課題2、課題3の時間経過に合わせて、操作する。)

時間経過に合わせて、メニューの課題の前に磁石を貼って、移動させていく。(以下同様)

なお自律学習ができるクラスでは、タイマーや磁石の操作は不要である。

自由なグループでの学習になれていないクラスでは、4人くらいの学習班による学習でもかまわない。

教師は、クラスが見渡せる位置に立って、グループで学習が行われているか、あるいは生徒の鉛筆が動いているか、確認する。

1人で、分からなそうにしている生徒がいれば、その生徒と近くのグループに、学び合いをしなさいと呼びかける。その生徒がグループに参加するのを確認する。

グループ全体が分からなそうにしてい、意見交流が進まないグループがあれば、教師はそばに行き、「他のグループと意見交流しなさい」と促す。生徒たちが動くのを確認する。

問題① () に適切な語句を入れなさい。

問題1. 1936(昭和11)年2月26日、陸軍の青年将校たちが、兵士約1,500名を率いて決起した事件は、何とよばれますか。

() 事件

問題2. 青年将校たちは、() を殺傷し、首相官邸・陸軍省・警視庁などを占拠しました。

問題3. 大日本帝国憲法のもとで、戦前の日本では、() が決めた国策はそのまま天皇が承認しました。また天皇が議会の決定がなくても命令できる国策も、

() などが天皇を助けて、政策の内容を作成するようになっていました。

問題4. 天皇の統治大権は、憲法(大日本帝国憲法)の規程にそって事実上()

されるという「() 制」の形をとっていました。

問題5. しかし青年将校たちは、こうした国策の決定にかかわる重臣や軍閥・官僚・政党などの「君側の奸」のために、国のかたち（国体）が破壊され、農民をはじめ国民が苦しい生活にあえいでいると考えました。君側の奸を倒して、天皇が（ ）を行える（ ）にすれば、君民一体による日本の発展がとげられると考えました。

問題①の資料

1936（昭和11）年2月26日午前5時、陸軍の青年将校たちが、第1師団歩兵第1連隊、同第3連隊、近衛歩兵第3連隊などの兵士約1,500名を率いて決起しました（二・二六事件）。

青年将校たちは、重臣を殺傷し、首相官邸・陸軍省・警視庁などを占拠しました。

重臣のうち、斎藤実内大臣（宮中の事務を統括、海軍大将）、高橋是清大蔵大臣（財政金融政策を統括）、渡辺錠太郎陸軍教育總監（陸軍軍人の教育を統括）は死亡。鈴木貫太郎侍從長（天皇の側でつかえる職員を総括。のち敗戦時の首相）は重傷。

岡田啓介内閣総理大臣（海軍大将）もおそわれましたが、松尾伝蔵予備役陸軍大佐（岡田総理の妹の夫。現役を退いた軍人が一定期間予備役につく）が身代わりとなって銃殺され、岡田総理は難を逃れました。

また重臣警備の警察官のうち5名が応戦して、死亡しました。

青年将校たちは、次のように主張して二・二六事件を起こしました。

我が国が世界のなかで秀でている理由は、万世一系（長く長く1つの系統・血統で続いていること）の天皇のもとに、君民一体の国体（国のかたち）をなしている点にある。

しかし近年この国体が破壊され、農民をはじめ国民は苦しい生活にあえいでいる。これは、重臣たちや、軍閥・官僚・政党たちが国体を破壊しているからである。我らはこれらの「君側の奸臣軍賊」（天皇のそばにいる悪い重臣や軍人）を倒して、国体を守り、すぐれた国体を明らかにしたい。

「君側の奸」を倒し、革新し、昭和維新をおこすということは、犬養毅首相が暗殺された1932年の五・一五事件においても、海軍の青年将校たちが主張したことでありました。

陸軍の青年将校たちは、天皇の権限を制限する「立憲君主制」ではなく、天皇が自ら決定を下していく「天皇親政」を求めたようにも思われます。

すなわち大日本帝国憲法のもとで、戦前の日本では、議会在議決した国策はそのまま天皇が承認しました。また天皇が議会の決定がなくても命令できる国策も、大臣などが天皇を助けて、政策の内容を作成することになっていました。

天皇の統治大権は、憲法（大日本帝国憲法）の規程にそって事実上制限されるという「立憲君主制」の形をとっていたのです。

しかし青年将校たちは、こうした国策の決定にかかわる重臣や軍閥・官僚・政党などのために、国のかたち（国体）が破壊され、農民をはじめ国民が苦しい生活にあえいでいると考えました。君側の奸を倒して、天皇が親政を行える国体にすれば、君民一体による日本の発展がとげられると考えました。

問題② () に適切な語句を入れなさい。

問題 1. 日本は、万世一系の天皇のもとに君民一体の^{こくたい}国体(国のかたち)をなしているという考えは、陸軍の青年将校のみの考えではありませんでした。

二・二六事件の前年の1935年の春には、議会で、この()の考えを強調して、「()」を批判する議論がわき上がりました。

問題 2. 岡田総理は、はじめは天皇機関説を擁護していましたが、激しい批判の中で天皇機関説に反対する立場となり、天皇を国家の(最高)()と考える天皇機関説は我が国の^{こくたい}国体の本質に()という声明(^{こくたいめい}国体明徴声明)を出しました。

問題 3. 我が国が世界のなかで()いる理由は、万世一系の天皇のもとに君民一体の^{こくたい}国体(国のかたち)をなしている点にあるという^{こくたい}国体の考えが強くなった背景には、欧米が()となっている世界の状況がありました。

問題 4. 第1次世界大戦の後、米欧は1921年と1930年の2つの海軍軍縮条約で日本の軍事を()しました。日本の海軍などの軍部、野党、右翼などの革新勢力は激しく()しました。

問題 5. また第1次世界大戦では()という考えが生まれました。戦場の軍隊のみが戦うのではなく、経済力や労働力など国力・()のすべてを戦争に投入するという考えです。

問題 6. 万世一系の天皇のもとに君民一体の^{こくたい}国体(国のかたち)をなしているという考えは、米欧に()して軍事力・国力・国民の総合力を()ようにするものであったように思われます。

問題②の資料

日本は、万世一系の天皇のもとに君民一体の^{こくたい}国体(国のかたち)をなしているという考えは、陸軍の青年将校のみの考えではありませんでした。

二・二六事件の前年の1935年の春には、議会で、この^{こくたい}国体の考えを強調して、「天皇機関説」を批判する議論がわき上がりました。天皇機関説を主張していた美濃部達吉貴族院議員は、激しい批判のために議員を辞職することになりました。

美濃部の天皇機関説は、国家は種々の機関の活動によって動いており、その最高機関は天皇であるというものでした。1900年代から1935年まで天皇機関説は、憲法学の通説(広く通用している説)でした。昭和天皇も、天皇機関説でさしつかえ無いと考えていました。

また天皇機関説は、国民の選挙 → 議員を選出 → 政党が勢力を拡大 → 議会で多数・政策決定 → 大臣が政策実行、というシステムが、最高機関である天皇を助けて、国務を進めて行くという考えでした。これは、国民(男子)が選挙によって議員を選ぶという「普通選挙」の考えとも適合していました。

しかし1935年に、議会において、軍出身議員や政友会議員が、天皇を国家の(最高)「機関」と考える天皇機関説を批判し、民間でも右翼や軍人などの革新勢力が天皇機関説と岡田内閣を批判しました。

岡田総理は、はじめは天皇機関説を擁護していましたが、激しい批判の中で天皇機関説に反対する立場となり、天皇を国家の(最高)「機関」と考える天皇機関説は我が国の^{こくたい}国体の本質に

反するという声明（国体明徴^{こくたいめいちよう}声明）を出しました。

岡田総理が、はじめは天皇機関説を擁護したことは、二・二六事件で青年将校が岡田総理を襲う理由の一つとなりました。

我が国が世界のなかで優れている理由は、万世一系の天皇のもとに君民一体の国体（国のかたち）をなしている点にあるという国体^{こくたい}の考えが強くなった背景には、欧米が中心となっている世界の状況がありました。

第1次世界大戦の後、米欧は1921年のワシントン海軍軍縮条約で主力艦の保有制限、1930年のロンドン海軍軍縮条約で補助艦の保有制限を定め、日本の軍勢力を制限しました。日本の海軍などの軍部、野党、右翼などの革新勢力は激しく反発しました。

また第1次世界大戦では総力戦という考えが生まれました。戦場の軍隊のみが戦うのではなく、経済力や労働力など国力・国民のすべてを戦争に投入するという考えです。

万世一系の天皇のもとに君民一体の国体（国のかたち）をなしているという考えは、米欧に對抗して軍勢力・国力・国民の総合力を高めようとするものであったと思われます。

問題③（ ）に適切な語句を入れなさい。

問題1. 二・二六事件をおこした陸軍青年将校と決起部隊に対して、（ ）大臣など陸軍首脳は最初は、その考えを（ ）行動をとりました。

問題2. しかしこうした陸軍首脳の対応にたいして、（ ）天皇は早くから決起部隊を（ ）することを強く求め続けました。26日午前9時には、陸軍大臣に速やかに事件を鎮圧するように命じました。以後も「朕（天皇が自分を示す言葉）が最も信頼している老臣をことごとく倒すのは、朕のくびを（ ）で絞めるに等しい行為である」（27日）などと決起部隊を非難し、強く鎮圧を命じ続けました。

問題3. （ ）首脳も（ ）天皇の強い怒りにふれて、鎮圧へと対策を変えました。

問題4. 29日に包囲軍は叛乱部隊に迫り、叛乱部隊は原隊に復帰しました。

叛乱を引き起こした陸軍（ ）たちは、その後、（ ）などの刑罰を受けました。

問題③の資料

二・二六事件をおこした陸軍青年将校と決起部隊に対して、陸軍大臣など陸軍首脳は最初は、その考えを認める行動をとりました。

26日の夕方には、諸君の「行動」（「真意」とする告示もある）は国体^{こくたい}を明らかにしようという至情（この上なく深い心）から出たものと認める、などを内容とする陸軍大臣告示を伝えました。

また同じく夕方に、決起部隊が占拠する地域を警備する警備部隊に、決起部隊をそのまま編入しました。決起部隊は、正式に治安維持にあたる「官軍」になったのです。

しかしこうした陸軍首脳の対応にたいして、昭和天皇は早くから決起部隊を鎮圧することを強く求め続けました。26日午前9時には、陸軍大臣に速やかに事件を鎮定するように命じました。

以後も、「朕（天皇が自分を示す言葉）が最も信頼している老臣をことごとく倒すのは、朕の

くびを真綿で絞めるに等しい行為である」(27日)、「朕自ら近衛師団をひきいて鎮圧にあたる」(27日)などと強く鎮定を命じ続けました。

陸軍首脳も昭和天皇の強い怒りにふれて、鎮圧へと対策を変えました。

26日午後8時以後には、佐倉・甲府の部隊、習志野の戦車部隊が東京に到着して、包囲側の兵力がそろい始めました。

27日午前3時前には、東京に戒厳令(戦争あるいは事変にさいして、軍事力をもって全国もしくは一地方を警戒すること)が適用されました。午前8時過ぎには、決起部隊の原隊復帰を命じる奉勅命令(天皇の命令)が決まりました。

28日午前5時には部隊を強制撤退(武力鎮圧)させることができる奉勅命令が発令されました。部隊は叛乱部隊となっていました。

29日に包囲軍は叛乱部隊に迫り、叛乱部隊は原隊に復帰していきました。

叛乱を引き起こした陸軍青年将校たちは、その後、死刑などの刑罰を受けました。

問題④ 「二・二六事件」をまとめた次の文章を読み、3つの資料を参考にしつつ、問題を考えなさい。

第1. 「問題①とその資料」では、二・二六事件の発生と陸軍青年将校の思いが述べられました。

第2. 「問題②とその資料」では、万世一系の天皇のもとに君民一体の国体(国のかたち)をなしているという考えと、米欧中心の世界への対抗について述べられました。

第3. 「問題③とその資料」では、二・二六事件の終結と昭和天皇の思いが述べられました。

問題 「陸軍青年将校の思いと、昭和天皇の思いについて、気づいたことは何ですか。」

指示2. 「気づいたこと」は、「分かったこと、思ったこと、考えたこと」です。

授業ノートのAの枠に書きなさい。7分間です。

学習メニューに示された課題①②③の時間25分間が終われば、「いったん鉛筆を置きなさい。回答の答え合わせをしなさい」と指示して、回答カードを配布する。

クラスの状態を見て、25分の途中で全員が問題④を考え始めれば、同様に回答カードを配布して、答え合わせを求める。

25分の途中で、少数の生徒が、回答ができなくて1人で困っていれば、回答が終わっている生徒たちに、学び合いをするように指示する。「学び合いが優先します」と言う。

意見交流が進まないグループがあれば、教師はそばに行き、「他のグループと意見交流しなさい」と促す。「学び合いが優先します」と言う。

(問題①の回答カード)

問題1. 二・二六事件

問題2. 重臣

問題3. 議会

大臣

問題4. 制限

立憲君主(制)

問題5. 親政

国体

(問題②の回答カード)

問題 1. 国体	天皇機関説	問題 2. 機関	反する
問題 3. 優れて	中心	問題 4. 制限	反発
問題 5. 総力戦	国民	問題 6. 対抗	高め

(問題③の回答カード)

問題 1. 陸軍	認める	問題 2. 昭和	鎮圧	真綿
問題 3. 陸軍	昭和	問題 4. 青年将校	死刑	

問題④ 答え合わせが終わったら、「二・二六事件」をまとめた問題④の3つの文章を読み、3つの資料を参考にしつつ、次の問題を考えなさい。

問題 「陸軍青年将校の思いと、昭和天皇の思いについて、気づいたことは何ですか。」

指示 2. 「気づいたこと」は、「分かったこと、思ったこと、考えたこと」です。

授業ノートのAの枠に書きなさい。7分間です。

生徒全員の答え合わせが終わり、生徒全員が問題④を考え始めれば、教師は、タイマーを課題4の個別学習の時間7分にセットする。(以下同様。タイマーの扱いについては、前述と同じ。) 個別学習の7分が終われば、次の指示をおこなう。

指示 3 自由なグループをつくって、意見交流しなさい。

友だちから新しい意見が出たら、授業ノートのBの枠に書きなさい。

5分間です。

次の指示は、学習班での意見交流のルールとして、普段から周知させておく。

指示 4 友だちの意見を否定してはいけません。友だちの意見を大切にしてください。

自分の意見を取り下げて、友だちの意見に乗り換えてはいけません。自分の意見を大切にしてください。

学習班で意見をまとめてはいけません。

自分の意見も、友だちの意見も大切に、意見交流して下さい。

教師は、あまり移動せず前方から、学習グループの活動を見る。

1人で、分からなそうにしている生徒がいれば、その生徒と近くのグループに、学び合いをしなさいと呼びかける。その生徒がグループに参加するのを確認する。

意見交流が進まないグループがあれば、教師はそばに行って、「他のグループと意見交流しなさい」と促す。生徒たちが動くのを確認する。

5分後、座席を、教壇に向かっておおよそ半円形にする。

生徒の挙手による相互指名で発言を求めていく。相互指名がとぎれれば、教師の許可を得て、生徒が個別指名しても良い。

児童の発言は、名前とともに板書する。板書は、授業ノート(Cの枠「板書」)にすばやく書き写

すことをルールとしておく。

教師は、「友だちの発言を聞いたら、すぐ授業ノートのCの枠に書き始めてください。黒板の先生の字で確認してください」と指示する。これは、生徒の発言の板書を書き写すときのルールとしておく。

(予想される児童の発言)

- ・青年将校は、重臣を殺せば、天皇親政になって、良くなると思った。
- ・青年将校は、万世一系の天皇のもとに君民一体の国体がしっかりしていれば良くなると思った。
- ・実際の戦前の日本は、重臣などが天皇を助け、天皇が権限を制限される立憲君主制だった。青年将校の、天皇親政というのは、無理なように思う。
- ・天皇が、国のことを何でも分かっている、すべて自分が決められるというのは、無理と思う。だから、昭和天皇も、青年将校を鎮圧しろと言った。
- ・天皇は、老臣たちを信頼していた。この老臣、つまり重臣を殺されたので、青年将校に強く怒った。
- ・陸軍首脳は、考えがふらふらしていた。
- ・当時の国体という考えは、青年将校だけでなく、議会の議員や民間や右翼も主張していた。
- ・陸軍青年将校は、天皇の親政を願っていた。しかし昭和天皇は、そのように考えず、青年将校を鎮圧することを求めた。思いが食い違っていた。など。

生徒の発言が止まって、時間があまれば、次の補助発問をする。

補助発問 陸軍青年将校は、「あわれ」ではありませんか。どう思いますか。

補助指示 授業ノートのDの枠に書きなさい。2分間です。

(予想される生徒のノート発言)

- ・青年将校は、天皇の親政を願っていた。しかし当の昭和天皇がそのようには考えていなかった。青年将校は思いが届かなくて、「あわれ」と思う。
- ・天皇の親政で近現代の政治が動くと考えるのがおかしい。後醍醐天皇の親政（建武の新政）も短期間で失敗した。青年将校は、未熟だったと思う。など。

残り5分になれば、次の観点のどれかにもとづいて、授業ノートにまとめを書かせる。(4つの観点は、模造紙に書いておいて、黒板に貼る)

- ①今日の授業について、友だちの意見にふれながら、自分の考えを書きなさい。
- ②自分の考えが変わった場合は、変わった内容とその理由を書きなさい。
- ③陸軍青年将校の思いと、昭和天皇の思いについて、気づいたことを書きなさい。
- ④陸軍青年将校は、「あわれ」ではありませんか。どう思いますか。

4 おわりに

最後の黒板の様子は、デジカメなどに撮っておき、授業ノートの「まとめ」などの生徒のすべてのノート発言とともに、学級通信にする。次時に学級通信を生徒に配布して、面白いノート発言を読んで、授業をふりかえる。授業のすべてを生徒に返す。

この授業の「ねらい」は、「二・二六事件をおこした陸軍青年将校たちの天皇への思いと、それを鎮圧することを主張し続けた昭和天皇の思いが食い違っている」という内容の生徒の発言（一斉授業あるいはノート発言）があれば、達成されたとと言える。

なお、こうした発言がなくても、生徒を誘導してはいけない。

陸軍青年将校の思いと、昭和天皇の思いの違いを、生徒がそれぞれの表現でとらえていれば、ほぼ「ねらい」が達成されたと考えられる。

第2章 第2時の授業

1 この授業について

二・二六事件の第1時に続く第2時の授業である。

二・二六事件の後、陸軍など軍部の発言力は、大きくなった。陸軍首脳は特に、軍備を拡充することを政府に要求し、政府はそれを受け入れていった。

陸軍首脳は、日本以上に軍備の拡充を進めるソ連に対抗するために、日本も軍備を拡充しなければならないと考えたのである。

この授業では、二・二六事件の後の、陸軍首脳の思いを生徒に考えさせたい。

2 この授業のねらい

この授業のねらいは、「二・二六事件の後の、陸軍首脳の思いについて、生徒が考えること」にある。

3 授業の展開

授業開始とともに、「問題①のプリント」と「問題①の資料」と「授業ノート」を配布する。「授業ノート」は、B4の用紙。本稿では省略。授業評価（授業に満足・普通・不満、時間は余った・普通・不足など）のアンケートを付加する。

指示1 自由にグループをつくって、問題の①を回答しなさい。
クラス全員が全部の回答を出来るように、学び合いをしなさい。
学び合いが優先します。
余裕があれば、資料を読み直して、問題②を考えなさい。
15分間です。

生徒が、自由なグループをつくって問題の回答を始めるとともに、教師は「学習メニュー」を黒板に貼る。

学習のめあて	
「二・二六事件の後の陸軍首脳の思いを考える。」	
学習メニュー	
はじめに	1分
課題1 問題① (学習グループ)	15分
課題2 問題② 個別学習	5分
学習グループ	5分
一斉学習	10分
課題3 問題③ 個別学習	3分
学習グループ	3分
一斉学習	3分
まとめ	5分

教師は、タイマーを課題1の15分に合わせて、スイッチを押す。(以下タイマーを同様に、課題2、課題3の時間経過に合わせて、操作する。)

時間経過に合わせて、メニューの課題の前に磁石を貼って、移動させていく。(以下同様)

なお自律学習ができるクラスでは、タイマーや磁石の操作は不要である。

自由なグループでの学習になれていないクラスでは、4人くらいの学習班による学習でもかまわない。

教師は、クラスが見渡せる位置に立って、グループで学習が行われているか、あるいは生徒の鉛筆が動いているか、確認する。

1人で、分からなそうにしている生徒がいれば、その生徒と近くのグループに、学び合いをしなさいと呼びかける。その生徒がグループに参加するのを確認する。

グループ全体が分からなそうにされていて、意見交流が進まないグループがあれば、教師はそばに行き、「他のグループと意見交流しなさい」と促す。生徒たちが動くのを確認する。

問題① () に適切な語句を入れなさい。

問題1. 二・二六事件ののち、() の政治への発言力は大きくなりました。

問題2. 陸軍首脳は、事件後の広田内閣の大臣の人選に介入しました。

(1) 軍備の充実などを積極的に進める内閣でなければならない。

(2) () 的な者(米欧に親近感を持つ者、統制より自由経済を求める者、民主的な者)の入閣に反対。

(3) 国体明徴運動(日本は、万世一系の天皇のもとに君民一体の国体(国のかたち)をなしているという考えを明確にする運動)に疑問を持つ者の入閣に反対。

など、() たちの主張も織り込みながら、新内閣を陸軍の意志に沿うような人

選にしていきました。

問題3. 広田内閣（1936年3月－37年2月）の馬場鑣一大蔵大臣は、昭和12年度予算で、大幅な（ ）増大を行いました。

問題4. 広田内閣のあとの林内閣（1937年2－5月）に対して、（ ）莞爾（陸軍大佐、参謀本部第1部長心得（代行））は「重要産業五カ年計画」（37年5月陸軍省決定）の原案を示して計画の実現を迫りました。

この計画は、1937年度－41年度の5カ年で、兵器産業・飛行機産業・鉄鋼業・石炭業・機械工業など、（ ）と（ ）工業の生産を重点的に拡大させるものでした。

林内閣は、この重要産業五カ年計画を受け入れていきました。

問題5. 陸軍首脳は、このように軍備の拡充と、兵器と重化学工業の大増産を計画していましたが、「五カ年計画」などとおるように、5年ほどかけて拡充・増産することを考えていて、すぐ（ ）することは考えていませんでした。

問題①の資料

二・二六事件（昭和11年、1936年）を起こした、陸軍の青年将校たちなど19名は死刑となり、そのほか関与した軍人などが処罰されました。

さらにこれらの青年将校と考えが近いとされた真崎甚三郎陸軍大将などの軍人が、現役を退役させられたり、陸軍の中心から遠ざけられたりしました。

しかし、二・二六事件ののち、陸軍の政治への発言力は大きくなりました。

陸軍大臣候補の寺内寿一陸軍大将など陸軍首脳は、事件後の新内閣（広田弘毅首相）の大臣の人選に介入しました。

- (1) 軍備の充実などを積極的に進める内閣でなければならない。
- (2) 自由主義的な者（米欧に親近感を持つ者、統制より自由経済を求める者、民主的な者）の入閣に反対。
- (3) 国体明徴運動（日本は、万世一系の天皇のもとに君民一体の国体（国のかたち）をなしているという考えを明確にする運動）に疑問を持つ者の入閣に反対。

など、青年将校たちの主張も織り込みながら、新内閣を陸軍の意志に沿うような人選にしていきました。

陸軍首脳は事実上、軍備拡充に反対の者、自由主義的な者、国体明徴に疑問を持つ者などがいたから二・二六事件がおきたのだと、新内閣をおどして、陸軍の求める大臣にしていきました。

また広田内閣（1936年3月－37年2月）の馬場鑣一大蔵大臣は、昭和12年度予算で、大幅な軍事費増大を行いました。

岡田啓介内閣の高橋是清大蔵大臣は、軍事費拡大を抑制したことが理由の一つとなって、二・二六事件で殺害されました。

高橋蔵相の後を受けた馬場蔵相は、陸海軍の要求を受け入れて、大幅な軍事費増大を実施しました。

また大蔵省は今後、陸軍について軍備充実6年計画にもとづく膨大な予算を、海軍についても第3次補充計画（5カ年）にもとづく膨大な予算を、毎年計上し続けることを約束しました。

さらに広田内閣のあとの林銑十郎（陸軍大将）内閣（1937年2－5月）に対して、石原莞爾（陸

軍大佐、参謀本部第1部長心得（代行）は「重要産業五カ年計画」（37年5月陸軍省決定）の原案を示して計画の実現を迫りました。

この計画は、1937年度－41年度の5カ年で、兵器産業・飛行機産業・鉄鋼業・石炭業・機械工業など、兵器と重化学工業の生産を重点的に拡大させるものでした。

この頃ソ連も、軍備を拡充し、重化学工業の大増産を進めていました。石原などの陸軍首脳は、第1次世界大戦以後の戦争は、総力戦となることを想定しており、総力戦に備えて兵器と重化学工業を大増産する体制を整えて、日本以上に拡充・増産を進めるソ連と対抗することを考えていたのです。

林内閣は、この重要産業五カ年計画を受け入れていきました。

陸軍首脳は、このように軍備の拡充と兵器と重化学工業の大増産を計画していましたが、「五カ年計画」などとあるように、5年ほどかけて拡充・増産することを考えていて、すぐ戦争することは考えていませんでした。

こうした状況が急変するのは、シナ事変（日中戦争、1937年7月）が勃発したためでした。

問題② 「陸軍首脳の思いについて、気づいたことは何ですか。」

指示2. 「気づいたこと」は、「分かったこと、思ったこと、考えたこと」です。授業ノートのAの枠に書きなさい。5分間です。

学習メニューに示された課題①の時間15分間が終われば、「いったん鉛筆を置きなさい。回答の答え合わせをきなさい」と指示して、回答カードを配布する。

クラスの状態を見て、15分の途中で全員が問題②を考え始めれば、同様に回答カードを配布して、答え合わせを求める。

回答

問題① 問題1. 陸軍 問題2. 自由主義（的）、青年将校
 問題3. 軍事費 問題4. 石原、兵器、重化学（工業）
 問題5. 戦争

問題② 答え合わせが終わったら、資料を参考にして、次の問題を考えなさい。

問題 「陸軍首脳の思いについて、気づいたことは何ですか。」

指示2. 授業ノートのAの枠に書きなさい。5分間です。

個別学習の5分が終われば、次の指示をおこなう。

指示3 自由なグループをつくって、意見交流しなさい。

友だちから新しい意見が出たら、授業ノートのBの枠に書きなさい。

5分間です。

グループでの意見交流のルールや、自由なグループでの意見交流についての教師の指導は、第1時と同じ。

5分後、座席を、教壇に向かっておおよそ半円形にする。

生徒の挙手による相互指名で発言を求めていく。相互指名がとぎれれば、教師の許可を得て、生徒が個別指名しても良い。

児童の発言は、名前とともに板書する。板書は、授業ノート（Cの枠「板書」）にすばやく書き写すことをルールとしておく。

（予想される児童の発言）

- ・二・二六事件を起こしたのは、陸軍青年将校だったが、陸軍がとがめられるのではなく、逆に発言力が大きくなった。
- ・陸軍首脳は、二・二六事件の後の広田内閣の大臣の人事の介入した。
- ・陸軍首脳は、軍備拡充に反対の者、自由主義的な者、国体明徴に疑問をもつ者の入閣に、反対した。
- ・馬場大蔵大臣は、昭和12年度予算で大幅な軍備増大を行った。
- ・大蔵省は、陸軍の軍備拡充6年計画や、海軍の第3次補充計画のもとづく予算を計上し続けることを約束した。
- ・林内閣は、石原完爾の重要産業五カ年計画を受け入れた。
- ・結局二・二六事件のあと、主導権を握った陸軍首脳が思う総力戦の体制が進んで戦争に入ってしまった。陸軍首脳の思いの影響力は大きい。
- ・陸軍首脳は、5年後の戦争に備えていた。陸軍首脳の考えで戦争になったのではなさそうだ。陸軍首脳の思いが少しでも進んだのは、青年将校の決起のためだ。事態を引き起こした青年将校の影響が大きい。
- ・二・二六事件のあとも、すぐ戦争になったのではない。戦争になったのはシナ事変の影響があるようだ。など。

生徒の発言が止まったら、あるいは残り15分くらいになったなら、次の発問をする。

説明1 二・二六事件をおこした陸軍青年将校たちは、死刑などの処罰を受けました。一方、陸軍首脳たちは、二・二六事件を利用して軍備拡大の要求を大蔵省や政府に認めさせました。

発問1 陸軍首脳はずるいではありませんか。

指示4 授業ノートのDの枠に書きなさい。3分間です。

個別学習の3分が終われば、次の指示をおこなう。

指示5 自由なグループをつくって、意見交流しなさい。

友だちから新しい意見が出たら、授業ノートのEの枠に書きなさい。

3分間です。

グループでの意見交流のルールや、自由なグループでの意見交流についての教師の指導は、第1時と同じ。

3分後、座席を、教壇に向かっておおよそ半円形にする。

生徒の挙手による相互指名で発言を求めていく。相互指名がとぎれれば、教師の許可を得て、生徒が個別指名しても良い。

児童の発言は、名前とともに板書する。板書は、授業ノート（Fの枠「板書」）にすばやく書き写

すことをルールとしておく。

(予想される児童の発言)

- ・ずるいと思う。陸軍首脳は、二・二六事件でも、始めは青年将校を指示するような態度をとっていた。昭和天皇に反対されて、青年将校を反乱軍として捕らえて行って、処罰した。しかし二・二六事件の後では、二・二六事件と青年将校を利用して軍備拡張などを認めさせた。
 - ・仕方がないと思う。ソ連が急速に軍備拡張している。ほっておくと日本はソ連に攻められるかもしれない。
 - ・日露戦争でソ連は日本に負けている。ソ連は日本を恨んでいるかもしれない。
 - ・ずるいと思う。陸軍青年将校が二・二六事件を起こしたのだから、陸軍首脳も責任を取るのが当然と思う。など。
- 陸軍首脳への批判が続く場合は、次の補助発問を行う。

補助発問「ソ連が軍備拡充し重化学工業の大増産しているときに、日本が軍備拡充と重化学工業の増産をしてはいけないのですか。」

残り5分になれば、次の観点のどれかにもとづいて、授業ノートにまとめを書かせる。(3つの観点は、模造紙に書いておいて、黒板に貼る。)前時の資料などを参考にしなさいと指示する。

- ①今日の授業について、友だちの意見にふれながら、自分の考えを書きなさい。
- ②自分の考えが変わった場合は、変わった内容とその理由を書きなさい。
- ③陸軍首脳の思いと、陸軍青年将校の思いと、昭和天皇の思いについて、強く印象に残ったことを書きなさい。

4 おわりに

最後の黒板の様子は、デジカメなどに撮っておき、授業ノートの「まとめ」などの生徒のすべてのノート発言とともに、学級通信にする。次時に学級通信を生徒に配布して、面白いノート発言を読んで、授業をふりかえる。授業のすべてを生徒に返す。

最後に、二・二六事件がおきたことで、表現の自由が無くなったわけではない点に注意したい。

二・二六事件の後、報道規制が無くなっても大新聞は、軍部への批判を行わず、自主規制(自ら自由な言論を抑えること)した。しかし「時事新報」は、社説(近藤操執筆)で、2月末から3月末まで17回、年末までに合計約60回、軍部を批判した。これらの時事新報の批判に対して、軍部からの取り締まりは無かった。

ただ、3月19日の社説「青年に希望を持たせる政治」には、軍部から注意があった。この社説で近藤は、陸軍の青年将校は全国の青少年の千分の一以下である、政府は、「青年」より「将校」の名におどろいて、陸軍の要求のみに従っていたのでは、決して全日本の青年に希望を持たせる政治とは言えないという内容の批判を書いた。

この社説に対して、戒厳司令部新聞班から、刺激的なので修正するように注意があった。軍部からの注意はこの1回だけであった。⁽¹⁾

また河合栄治郎は、『東京大学新聞』の3月9日号に、「二・二六事件の批判」を書いた。「我々が

寝ている間に、武器を持つゆえに、我々多数の意志が無のように踏みつけられるなら、まずあらゆる民衆に武器を配布して、公平な暴力を出発点として、我々の勝敗を決めるしかない」という内容であった。

戒厳令下の検閲を通すため、伏字（語句や文章を隠す）にしたところが多くあったが、河合の論文は東京大学新聞に掲載された。⁽²⁾

その他、『改造』や『中央公論』といった総合雑誌には、軍部批判やファシズム批判などの論文が次々に掲載された。

国会では、斎藤孝夫議員（36年5月）や浜田国松議員（37年1月）などが軍部批判を行い、大新聞もこの内容を記事にした。

1937年4月には、衆議院の選挙が行われた。第1党民政党179人、第2党政友会175人の当選であったので、国民の多くは、民政党と政友会を支持したことになる。民政党と政友会は、林銑十郎（陸軍大将）内閣がめざす軍備拡充・重化学工業拡充の政策に賛成したので、国民の多くもこの政策を支持したと言えるかもしれない。

しかし他方、社会大衆党が36人の当選者を出して、民政党、政友会につづく第3党になった。総議席466のなかでは1割以下の少数政党だが、36年2月の総選挙の時の社会大衆党当選18人にくらべると、2倍に増大した。

社会大衆党は、軍備拡充と国民生活安定の両立を主張し、働く国民に支持を求める「無産政党」（労働者を支持基盤とする合法政党）であった。社会大衆党は、陸軍の軍備拡充を賛成していたが、林銑十郎内閣が軍備拡充と重要産業五カ年計画を進めるなかで、国民生活を圧迫する軍備に偏った予算を激しく批判するようになった。国民は、この社会大衆党への支持を増やした。

さらに社会大衆党は、37年5-6月の市会議員選挙でも躍進した。京都では10人全員当選（京都市第2党）、大阪市では20人当選（大阪市第2党）、福岡県八幡市では9人当選（民政党と同数で八幡市第1党）などであった。

国民は、総選挙に続く地方議員選挙でも社会大衆党への支持を高めていったことが分かる。

二・二六事件のあとも、軍部批判を行う言論の自由は残っていた。また国民は選挙において、多くが民政党・政友会を支持したが、他方、国民生活の安定を主張して軍部を批判する無産政党を支持する意見も高まった。

こうした状況も、シナ事変（1937年7月）の勃発により急変することとなったのである。⁽³⁾

注：(1) 前坂俊之「日本のメディアはいかに報じたか」（藤原書店編集部編『二・二六事件とは何だったのか』藤原書店、2007年、pp.99-112）

(2) 川西重忠「河合栄治郎」（同上、pp.164-170）

(3) 坂野潤治『昭和史の決定的瞬間』ちくま新書、2004年

参考文献

- ・藤原商店編集部編『二・二六事件とは何だったのか』藤原書店、2007年
- ・北博昭『二・二六事件 全検証』朝日新聞出版、2003
- ・須崎慎一『二・二六事件 青年将校の意識と心理』吉川弘文館、2003
- ・高橋正衛『二・二六事件 「昭和維新」の思想と行動』（増補改訂版）中公新書、1994年。初版は1965年。
- ・伊藤隆『日本の歴史 30 十五年戦争』小学館、1976年

後注：本稿は、藤井英之先生をはじめとする新中学社会科授業研究会（新中社）に参加する先生方との議論に負うところがあります。なお問題点がある場合の責任はすべて宮崎にあります。